市報 にいがた

発行所　新潟市役所
新潟市西堀通6番町866
電話 代表(28)1000
編集人　高橋甲子
（市民企画部広報課）
印刷所　㈱第一印刷所

老人福祉特集号

指人形劇づくりに励むことぶき大学の面々

「美しき老後」であるために

新潟市長　川上喜八郎

今年も老人福祉週間がはじまる。おとしよりはもちろん、いまはまだ若い人たちも、せめてこの週間のひとときを、おとしよりをめぐる現状を考え、さらに急速にすすんでいる日本の老齢化現象、そのときに予想される問題の中にわが身をおいてみることにしたらどうだろうか。全国の人口推計によれば全人口に占める六十歳以上の老人人口の割合は現在十二％が昭和六十年に十四％、昭和九十年に二十四％になるという。

老人クラブの会合などで元気な人たちが、いろいろの面で活動している姿を見ることができる。ほんとうにしあわせそうである。反面、ねたきりのおとしよりもいる。私自身その年になって果してどんな生活をしているだろうかと、フッと考えたりする。

おとしよりがしあわせであるための条件、それは㈠健康であること㈡一定の所得が年金などで確保されていること㈢生きがいをもっていること、だろうと思う。もちろんこの中味についての考え方は個人差があり、またあくまで主観的なものであるが、このうちの一つでも欠いたときは、しあわせとはいえないのである。これらの条件整備のために、国、地方の政治・行政はその役割分担を明らかにして、より積極的な対応をはじめる必要がある。㈠について新潟市は検診活動などは他と比較してある程度前進しているが、さらに充実強化が必要であるが、医療費の確保はできるだけ早く国の制度として確立して欲しい。㈡について年金制度をどのような内容として整備するのか、国政の問題である。現在の内容ではどうにもならないのである。㈢については主体はおとしより本人であり、行政や地域社会は場を提供するなど援助する立場である。うつろな状態で一日中公園のベンチで過している北欧の老人の写真を見ると、おとしよりのしあわせのことを考えさせられるのである。

働きざかりの人も若い人も、「美しき老後」のために自ら用意をはじめる、おとしよりは健康と生きているあかしのために一工夫する。老人福祉週間はこんな考え方で過したいと思う。